

南アルプス南部（静岡市域）ライチョウ生息状況等調査の結果とりまとめ

<調査の背景・目的>

環境省は、ライチョウ保護の取組みのため、ライチョウ保護増殖事業計画（以下、「増殖計画」）を策定しています。増殖計画では、ライチョウの生息環境を圧迫している推定要因をいくつか挙げているが、その要因の特定は現時点では困難であり、今後の調査分析により、その要因を明らかにすることを目標の1つとしています。

上記のように、国内各地でライチョウ保護の取組が進められる中、ライチョウ生息地の南限であるイザルガ岳（静岡市）では、平成23年以降ライチョウの繁殖が確認されていないなど、生息南限地のライチョウの生息環境の消失が懸念されている。

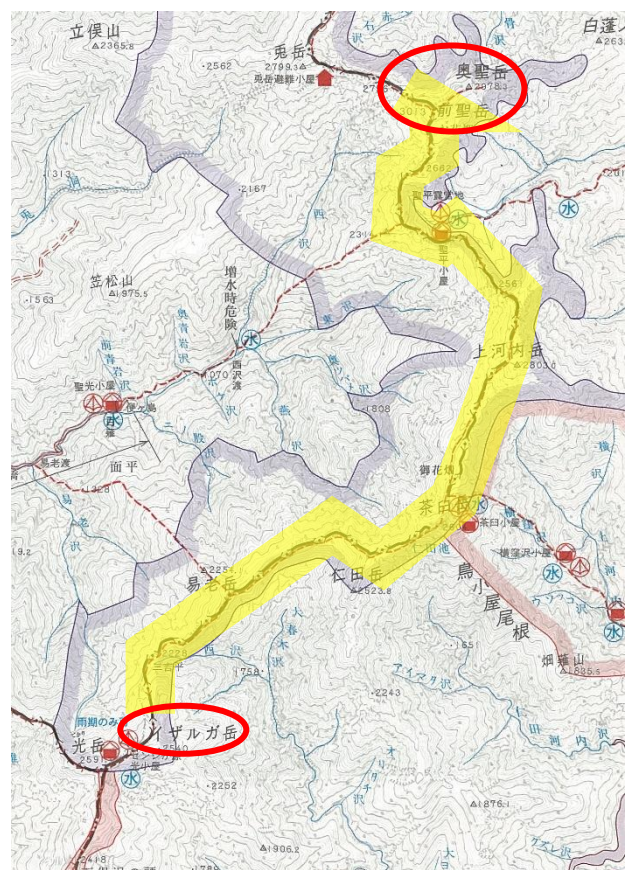
これらのことから、静岡市は、南アルプス南部（聖岳～イザルガ岳）における継続的なライチョウ生息状況調査及びライチョウの生息環境の変化を把握するための調査を実施した。

<調査方法>

現地調査では、ライチョウの個体情報（雄雌、成鳥・幼鳥）や生活痕跡（糞、砂浴び跡等）を記録し、なわばり数を推定した。なお、なわばり数の確認は茶臼岳～イザルガ岳とした。また、生息環境の変化を把握するための現地調査では、ライチョウの捕食者と考えられている鳥類及び哺乳類の生息状況等を記録するとともに、植生記録等も実施した。いずれも調査期間はおよそ5月～11月（なわばり期～家族期）とした。

<調査場所>

南アルプス南部（聖岳周辺～イザルガ岳周辺）



調査範囲

<生息状況調査結果>

生息南限地のライチョウなわばり数の推移は下表のとおりです。過年度と比較しても、大きな変化は見られませんでした。

(下表は、静岡ライチョウ研究会及び長野県環境保全研究所が共同で実施した独自調査の結果も反映しています。)

調査年	イザルガ岳	仁田岳	茶臼岳
平成10年	2		
平成11年			
平成12年	2		
平成13年			
平成14年	2		
平成15年	1		
平成16年	2		
平成17年			
平成18年	1	1	2
平成19年	1		3
平成20年			2
平成21年	1		3
平成22年	1	1	3
平成23年			3
平成24年		1	2
平成25年		1	2
平成26年		1	3
平成27年		1	2
平成28年	1	1	2
平成29年	1	1	4
平成30年	1	1	2

※網掛けは調査年を示す。

※は、静岡市による委託調査業務の結果

<生息環境圧迫要因調査結果>

環境省「第一期ライチョウ保護増殖事業実施計画」によれば、ライチョウの生息環境を圧迫する要因として、

- ① 捕食者となり得る種（キツネ、カラス等）がライチョウの生息地へ分布を拡大することによる影響【捕食者による圧迫】
- ② 従来生息していなかった種（ニホンジカ、ニホンザル等）が高山帯に侵入し、高山植生が採食されることによる生息環境の劣化【侵入種による圧迫】
- ③ 山岳環境の汚染に起因する感染症の原因菌等の侵入【感染症による圧迫】
- ④ 登山客等の増加に伴う攪乱【登山者による圧迫】
- ⑤ 気候変動による営巣環境・植生等への影響【温暖化による圧迫】

を挙げている。本調査では、生息南限地の① 捕食者による圧迫、② 侵入種による圧迫、⑤ 温暖化による圧迫について、取りまとめた。

（下表は、静岡ライチョウ研究会及び長野県環境保全研究所が共同で実施した独自調査の結果も反映しています。）

捕食者による圧迫	<ul style="list-style-type: none">・現地調査で確認された、ライチョウを捕食するとされている鳥類は、イヌワシ、チョウゲンボウ、ハシブトガラスの3種。ライチョウを捕食する可能性がある鳥類は、ノスリの1種。・現地調査で確認された、ライチョウを捕食するとされている哺乳類は、ニホンザル、キツネ、テン、オコジョの4種。・哺乳類の糞を採取し（ニホンザル、キツネ、テン）、内容物を分析した結果、ライチョウを捕食した痕跡は見つからなかった。
侵入種による圧迫	<ul style="list-style-type: none">・現地調査で確認された、高山帯に新たに侵入し、ライチョウの生息環境を劣化させるおそれのある種は、ニホンジカ、ニホンザルの2種。
温暖化による圧迫	<ul style="list-style-type: none">・ライチョウ営巣地の植生調査の結果、営巣することが多いハイマツ群落が優占しているものの、群落内にはオオシラビソ、コメツガなどの亜高山帯針葉樹林を構成する木本類も確認された。

上記のように、生息南限地では、ライチョウの生息環境を圧迫している可能性がある推定要因として、捕食者による圧迫や侵入者による圧迫が挙げられますが、現在はライチョウの生息数を減少させるまでの要因には至っていないと推測されます。

そのような中、今後地球温暖化が進行することで、ライチョウの生息環境を悪化させることが、最も懸念されるマイナス要因であると考えられます。

<調査結果に係る所見（調査実施者（業務受託先）のコメント）>

ライチョウの国内生息地（頸城山塊、北アルプス、乗鞍岳、御岳山、南アルプス）のうち、特に個体数の減少が著しいとされている南アルプス北部等に比べ、生息南限地のライチョウの生息数は、過年度と比較しても大きな変化が見られませんでした。また、他の地域ではライチョウの生息環境を圧迫する要因とされている捕食者の問題も、同地域では大きな問題となっていません。以上のことから、生息南限地のライチョウにとって、今後最も脅威となり得るのは、地球温暖化による生息環境の悪化であると推測されます。

また、近年の調査結果から、南アルプスに生息するライチョウ個体群の間では、南アルプス北部から南部への長距離移動個体が発見される等、他地域から生息南限地への個体の供給が確認されており、生息南限地のライチョウを保全するためには、南アルプスの他地域の個体群の調査、保全も必要であると思われます。